

## 学校の先輩ってこんな感じですか？

### 学則三十四条

・学内に娯楽用具などを持ち込むべからず

「何？ このオチ。コイツ読者舐めてんの？」

扉を開けると蒲田先輩が眉間に皺を寄せてマンガを凝視していた。放送室の扉を開けたはずなのに、どうやらいつのまにか先輩の自宅にお邪魔してしまったらしい。先輩の部屋は意外にも可愛らしい小物で溢れていて、壁紙なんてピンクの花柄

「って、イヤイヤイヤイヤイヤ」

思わず脳内ノリ突っ込みをってしまった。

「ちよっと何やってんですか先輩？」

どういうわけか一日で放送室の壁紙が無機質なクリーム色から、カラフルにも度が過ぎるピンク色が変わっていた。俺の脳内がバラ色ピンクになったわけではなく、実際に部屋一面が真っピンクに統一されている。

「……………ほえ？ ああ、福田。何って何が？」

蒲田先輩はパイプ椅子の上に正座しながら上目遣いでこっちを見てきた。自前のモフモフ座布団を正座で器用に足で固定しながら、いつものように寛いでいる。

「小物とかマンガはいいとしてこの壁紙ですよっ！ 何勝手に張り替えてるんですか！」

バンバンと壁紙を叩き、異常事態をアピールしてみる試み。

「ごめん、ピンク嫌いだった？」

「そういうことじゃねえっス！」

「でも、先生は納得してるし問題ないはずよ？」

「……………え、そうなんですか？ ………………え？ ホントに？」

「本当だってば、じゃなきゃ今頃大騒ぎよ」

「……………あ、いや……………まあ、そうですけど」

「そうそう、最期には『もう、好きにしてくれ』って」

「それ完全に諦められてるよ」

「そう？」

蒲田先輩は適当に相槌を打つと、これまた自前のノートパソコンで何やら調べ物を始めた。どうやら読んでいたマンガのレビューサイトを検索しているらしい。先輩は時々独り言を呟く癖があるので聞き耳を立てていると「この作者最悪」とか「この●●●マンガが」とか言いたい放題言っていた。

二人しかいない放送部員の片割れを無視しながら画面とにらめっこする先輩は、あまり年上とは思えない。そんな先輩を見ながら自分専用のパイプ椅子（パイプ椅子の中でも座る部分が何故か非常に柔らかい）としてもレアな椅子・音楽系の部室に眠っていることが多い）を出して座った。

そういえば昨日は法事で丸一日学校を休んだことから察するにこの部屋の壁紙を張り替えたのは昨日ということだな。しかし、そうなるのと看過できない問題が一つ問題が発生する。

「でも先輩、どうやってあの放送機材をどけたんですか？」

学校指定のカバンを

「うん？」

蒲田先輩は全体的にほっそりしているし、体力も通常文化系クラブ員並みだったはずだ。とてもじゃないけどこの機材達を一人で動かせるとは思わない。この学校は私立じゃないけど、放送室としては普通に色んな機材が揃っている。少なくとも大の男が二人は必要だ。

「ああ、先生に手伝ってもらったのよ」

「よく手伝ってもらえましたね」

まさか部屋の壁紙を張り替えるためにそこまでしてくれるとは。

「まあ、私にかかればちよろいもんよ。押して駄目なら引いてみなって言うでしょ」

「そういう格言は知ってますけど………具体的にはどうやったんです？」

「ああ、もうっ！ 福田はそういうところが駄目なのよ！」

外人、もとい外国人並みのオーバリアクションでいきなり蒲田先輩は嘆いた。

「え、何ですかいきなり」

この有様を知らない人が見たら、気が触れたと勘違いされても仕方ないと思う。

「何でもかんでも人に聞いてたら駄目、自分で考えなきゃ！」

「……………すいません」

「これだけの状況証拠がありながら……………ふう。まだまだだね、明智くん」

「すいません、俺にそこまでの推理力はまだないッス」

そしてそれは誰から目線のお言葉なんでしょう。

「まったく、勉強が足りないよ光秀くん」

「そっち！？ 普通は小五郎じゃね？ え、さっきのって信長目線だったの？」

「それは遡ること一昨日のことだった」

「俺の突っ込みは完全スルーなんですわ……………」

\*\*\* 蒲田先輩の回想パート \*\*\*

「はあっ はあっ はあっ はあっ はあっ はあっ ……………」

見目麗しい美少女が廊下を走っている。その姿は神話の世界から飛び出てきた女神そのものだった。長い黒髪からは光の星屑が生まれ、少女の足跡からは新たな生命が息吹を上げる。

地上に舞い降りた聖域サンクチュアリがそこにはあった。人々は言う、そう彼女こそが……………え？ 何？

何よ、こつからが超いいところなのに……………ええ？ はいはい、わかったわよ、はしよれば良いんでしょ？ はしよれば。全く。あーはいはい、わかりました、わーかーりーまーしーたー！

「てんて〜！ 大変なんですう〜！ てんて〜！」

先生という言葉をあえて幼く言うことでギャップ萌えを引き出す技。私こと蒲田詩穂里の得意技だ。なお、必殺ゲージはドットも消費しないという優れもの。

「……………ああ、蒲田か……………どうした、また何かやったのか……………」

下校途中を呼び止めた担任の倉田が伏目がちに私を見ってくる。なるほど、美少女を目の前にして照れているんだな。ふふっ、憂い奴め。

「違うよ〜てんて〜そうじゃないお〜！」

「なら、どうした……………出来れば、明日以降にしてくれないか……………もう、今日は疲れたんだ……………もう、帰りたいんだよ……………」

どうやら、私と一緒にいるのが恥ずかしいようだ。言葉とは裏腹に私の方をこれ見よがしに見てくる。少しでも私の御姿を網膜に焼き付けたいらしい。まったく、困った奴だ。

「大変なの〜放送室が大変なことになってゆの〜！」

「……………ああ……………そうか……………」

担任の倉田が後ろを向いて目元を拭った。どうやら泣いているらしい。変なところで格好をつける奴だ。嬉し涙なら、素直に見せればいいものを。でも、そこが倉田らしいといえば、倉田らしいのだ。

「ほらほら〜は〜や〜く〜！ てんて〜は〜や〜く〜！」

「……………ははっ……………はははっ……………」

やっぱり本当は嬉しかったらしく、手を引っ張ってやると倉田は控えめに笑っていた。

しかし、何も私の武器はこの清纯可憐な美貌だけではないっ！ 智謀策略もお手の物。可愛い見た目で相手を煽めて、聡い頭で相手を嵌める。それが私、蒲田詩穂里だっ！

「ちよつと、何よ大事な用って。あたし達これから部活なんだけど？」

放送室に行くと、予め集めておいた木っ端女子共が部屋の前で待っていた。このとき餌を待つブロイラー（にわたりのことだよ）を何故か思い出したの言うまでもない。

「ごめんごめん、どうしても伝えておかないことがあって」

「そんなの放送で言えよ、なんのための放送部員なのよ？」

名前も知らない放送委員の少女A（頭悪そうの略）が文句を言ってきた。ちなみにこの木っ端女子共は放送委員であって放送部員ではない。格が違うのだ、格が。

「そうそう、あんたと違って忙しいのよこっちは」

名前も知らない放送委員の少女B（バカッポイドの略）が便乗して口答えをしってくる。こいつら何の部活に入ってるんだっけ？

「いいから、早くしてよ。それと倉田、お前も何とか言えよな」

「……………ああ、す、すみません……………」

名前も知らない放送委員の少女C（ちよっと人間ではありえない体型の略）が倉田もついでに攻撃してくる。一人じゃろくに文句も言わなくせに、数にモノを言わせてでかい態度とは。倉田みたいな小動物を虐めるなんて、心の狭い木っ端女子共だな。

「でも、放送するのはちよっとまずい事態なのよ……………」

A子「はあん？ だから何なのよそれ」

「カゴンラグアゾウリムシって知ってる？」

B子「……………はあ？ 何それ」

「南米原産の虫で成虫でも大きさが1mmにも満たない小さな虫なの」

C子「だから、それが何なの？」

「いいから、最期まで聞いて。私の伯父さんにそういう昆虫とか微生物とかを研究してる人がいるんだけど、この前その伯父さんから海外宅配便が届いて開けてみたの。中に入っていたのは小さな小瓶で、中身は何の変哲も無い泥の塊だった。入ってた手紙を呼んでみると、普段は現地の人間も入れない場所ですり取ったものらしくて凄い貴重な泥だって書いてあったの。別にあたしはそんな風に思わなかったけど、あんまり凄いつて書いてあったし、折角だから福田にも見せてやろうと思って昨日持ってきたわけ。案の定福田は全然珍しがらなかったけど、その小瓶を開けたときにうっかり機材に零しちゃったの。勢い余ってほとんど零しちゃったんだけど、機材の裏だったし、別に壊れてないみたいだったからそのままにして置いたんだけど……………でも……………今日の朝、伯父さんからいきなり国際電話があって、前に送った小瓶をすぐに回収させて欲しいって言うの。どうしてって聞いても、しばらくは曖昧な答えで要領を得なかった。でも、最後は観念して本当のことを話してくれた。その泥は高濃度の栄養が固まっていて、大量の微生物が生息できる地盤のようなもので、とりわけカゴンラグアゾウリムシが大量に内包されていたことが後日判明したって」

「ここで一呼吸。」

「……………そうなの、その泥水はカゴンラグアゾウリムシの温床だったわけ。通常自然界で生息している分には何の問題も無い生物なんだけど、有機体に接触すると即座にその体

内機構に侵入する性質を持っていて、小型の動物でも僅か数時間で体が麻痺して、十数時間で死に至らしめる恐ろしい生物なの。普通に乾燥してる場所じゃあそれほど繁殖したりはしない生物なんだけど、泥の中や暗所に閉じ込めちゃうと途端に増殖するこいつらは、現地では持ち出したりすることを禁止されてるわけ。あたしはすぐ伯父さんに状況を説明したんだけど、伯父さんは『しばらく学校に行くな』って言うだけでどうしろとは言ってくれなかった。仕方なく自分で調べたら、海外の科学者サイトでその生物が人体への侵入経路がいくつか存在するって論文を見つけた。一番多いのは口腔とか粘膜なんだけど、爪と肉の間とかからも侵入することがあるって話。要するに末端神経ってことかしらね。だから、この部屋を殺菌消毒する前に聞いておきたいんだけど、みんな体調に変なところとか出てたりしない？ 変な咳が出たり妙に目が痛くなったりしていたら教えて。日本の病院じゃ治療出来るところが限られてるから、症状が出てくる前に対処しないと……………命が危ないの」

見ると三人は青ざめた表情で自分の指を凝視していた。

「驚くほどスムーズな妄言でしたね」

「あいたう！」

現国のノートで蒲田先輩の頭を軽く引っぱたくとやっと独り言が止まった。蒲田先輩は時々自分の世界に迷い込んでしまうので、たまに引き出してあげないと延々と時間が過ぎるハメになる。

「あにすんのよっ」

年上には思えない態度で噛み付いてくる先輩は、がちやがちやと椅子を揺らしながら今にも飛び上がりそうなテンションだった。

「本当はどうしたんですか？」

「……………機材の中にG（要するにアレ）が入り込んで、機材の底面にタマゴを死ぬほど一杯生んでたって話したらこうなった」

「ゾツとする話ですねぇ！」

俺は言霊とか信じるタイプなんだから、マジでこういう話は止めて欲しい。機材の中に蠢く大量のGとベビーG（何だか昔流行った腕時計のようにも聞こえる）その光景が脳裏に過ぎり悪寒が走った。放送委員の女子は俺より遥かに恐れ戦いたことだろうよ。勢い余って機材を外に引っ張り出すことを決めたのも分かる気がする。解体と掃除は先生の仕事になったんだろうけどさ。

「お陰様で壁紙の張替えが僅か半日で終わったよ」

「悲しいことにそのときの先生の顔が思い浮かびますよ」

「そうそう『何ということでしょう』って顔してた」

「それ間違いない悪い意味っスね」

蒲田先輩はそうやって放送委員の連中を焚きつけた後、機材が外に出たのを見計らって壁紙を張替えたんだろう。多分「いいじゃんついでじゃん」とか言いつつやったに違いない。相変わらずな人だ。

「Gなんてずっと前から住んでたのに、馬鹿な子たちよね（しかも大家族で）」

「聞き捨てならねえ！（特にカッコ内の台詞）」

「そんなことより、聞いてよ福田」

「いやいや、あんた本当に女の子ですか？」

少しは怖がれ、Gに失礼だろうっ！

「このマンガ、オチが最悪っ！」

蒲田先輩は勢いよく椅子の上立ち膝になると、最後付近のページを見せ付けてきた。どうあっても俺の話聞く気はないらしい。

「……………ああ、はいもう。分かりましたよ。何ですか？ そのマンガって。俺あんまりそういうの詳しくないんですけど？」

「え？ 知らないの？ ………………ジェネレーションギャップってやつかしら」

「違えよ、ほとんどダメだよ」

「聞いたことない？ このタイトル。ドラ———」

「ゲホゲホゲホゲホッ！」

蒲田先輩から本のタイトルを聞く瞬間、何故か呼吸器官が言うことを聞かなくなった。

「……………何いきなりむせてんの？ 福田」

「……………よく分かりませんが、唐突に器官が収縮しました」

神様を信じてはないけど、何かこれ以上は言わないほうがいい気がした。背中にはじんわりと冷や汗が滲んでいる。

「まあいいわ。とりあえずこのオチよっ！ 散々引つ張った挙句、全部問題を棚上げして終わり腐ったこの感じ！ ええっ！？ どういうことっ！」

「そんな文句は出版社か作者に言ってくださいよ」

本音を言おうか。知らねえよそんなもん。

「そんなこと言われなくても分かっているわっ！ でも……………こう、何と云えばいいのかしら、全然消化できない生ものを食べたときのあのムカムカ感とそっくりなこの気持ち。どうすればいいのさっ！」

「とりあえず寝てください」

てか、何だよ。消化できないナモノって。

蒲田先輩が世の中に対して不平不満を言うのはいつものことだった。そして、それが結構どうでもいいっちゃなことだったりするのよね。

聞き分けの無い子供のように唸る先輩を適当に宥めつつ、いつものように寝かせにかかる。

寝かせるとは言っても、この部室には余計なスペースはほとんど無く、寝転がることはほとんど出来ない。椅子とクッションを上手く融合させ、簡易ベットを作ることによって安眠スペースを確保しているのだった。蒲田先輩の簡易クッションベット作成の腕は日進月歩上手くなる一方であり、明らかに人生の無駄スキルを順調に伸ばしていた。

「……………ふう、まあ怒っても寿命が縮まるだけだしね」

「いや、知らんすけど」

ものの数秒でベットを作り上げ、蒲田先輩は安眠に向かって順調に体を弛緩させていく。最初に会ったときからの疑問だが、俺に対する警戒心が全く無いのはどういうことか。

「ああ、蒲田先輩。そういえばですけど」

「……………ん、なによ？」

すでにちよつと眠たげな先輩。寝付きの良さは半端ない。

「学校にマンガ持ち込むのは校則違反スよ」

「……………はあ？ そんなの何処に書いてあるのよ？」

「え……………だから……………あつた、ほらここ。書いてますよ、生徒手帳に。学則

三十四条」

「……………それには『娯楽用具』って書いてあるでしょうが」

「はあ……………いや、だからマンガは娯楽用具でしょ？ どう考えても思いつきりストライクじゃないっすか」

「……………まったく……………わかってないわね……………いいこと？」

娯楽ってのは『仕事や勉学の余暇にする遊びや楽しみ』って意味よ」

「いや、まあ知ってますけど？」

「……………このマンガ、全然面白くなかった……………」

「……………は？」

「だーからー、このマンガ全然面白くなかったって言ってるの」

「……………え？」

蒲田先輩が一呼吸した。

「読んでて楽しくないモノなんて娯楽じゃねえー！ そうだろっ！ 福田あ！ だから、あたしが持ち込んだこのマンガは娯楽用具なんて代物じゃねえっつうんじや———」

「なんでやねん」

うがー！ つと奇声を発したと思いきや、蒲田先輩はぱたりと静かになった。完全に寝入っ  
たらしい。まったく、どうしようもなく相変わらずな人だった。

「……………お」

「……………ああ、やっと起きたんスカ？」

「……………いまなんじ？」

「六時つすよ。下校のチャイム流しますか？」

「……………ほん、てけとーにしといて」

「はいはい」

そう言われた俺は、放送部の唯一の仕事である下校チャイムをいつものように鳴らした。ちなみに通常の放送（朝・昼・授業終わり）は自動で放送が開始されるし、生徒の呼び出しとかは放送委員の仕事だ。放送部の仕事は平日の下校チャイムぐらいしかない。

「……………やべ、ねちがえた」

打ち上げられた魚を彷彿とさせるような寝姿で蒲田先輩は固まっていた。そこで人魚のようにと描写出来ないのがちよつと悲しい。

「大丈夫スカ？ 先輩」

「じよばない」

「いや、何語ですかそれ」

「俺語」

「あんた自分を俺って言ったこと一回もないでしょ」

「だな」

「……………もういいから、いい加減起きてくださいよ。俺、帰れないじゃないスカ」

「うむ」

それから何とか体を起こして、蒲田先輩を椅子に座らせることが出来た。半眼のその容姿は今後一生、親でも見せないほうがいいと思う。しばらくしても体の芯が定まらないようで、ふらふらしている。

「先輩、お茶どうぞ」

「……………おけ」

「それ飲んだら目覚まして。さっさと帰りますよ」

わずずいっとお茶を啜るその姿は華の女子高生の面影すら無かった。田舎のおばあちゃんの家がフラッシュバックする。あの時の赤とんぼには本当に悪いことしたと思ってる。

「……………ん、そういえば福田」

「なんですか？」

「……………なんで唐突に学則のことなんて言い出しなのよ」

「いま噛みましたね……………てゆうか、それは俺の台詞なんですけど？」

「……………なんでい？」

「この間俺が髪染めてきたとき、先輩めっちゃ怒ってたじゃないですか。あん時、はつきりと



『校則違反だから駄目っ！ 染め直してコイツ！』って言っていましたよ」

「……………ほー」

「え？ ヒトゴト？」

「……………ま、そんなこともあるんじゃない」

くすくすと無邪気に笑う蒲田先輩は、そうしていると本当に人畜無害の天使に思えなくもなかった。ただそこにいるだけなら、そこら辺の美術品よりよっぽど価値があると言っても過言ではない。

「……………まったく、からかう相手が欲しいなら、そこら辺の同級生と適当に付き合ったらいいんじゃないスか？」

「……………なにそれ」

「猫を被れば、先輩はほぼ無敵ですよ。そこだけは俺が保証します」

「……………いや、やめとく」

「何ですか？」

「……………あたしは楽しいことだけしておきたいの」

「……………？」

「恋愛なんて、全然面白く無い。だから、あたしはそんなことしない。だって――

そんなこんなで下校時刻。

「……………福田、お腹空かない？」

「まあ、空きましたね」

「ジャンケンしよつか？」

「何か賭けるんスか？」

「うん、ルールは簡単『ジャンケンで負けた福田が勝った相手にご飯を奢る』ただそれだけ」

「ルールという意味を一回辞書で確認してくれ」

「ヨーロッパ最大の工業地帯」

「ここにきてなんという無駄知識！」

俺と先輩は帰る方向が近くて遠い。帰り道沿いにある先輩の家を通り過ぎて、その後二駅移動したところが俺の家だ。こういうところは変に暗示的だよな。

変と言えば、先輩はあの時も変なことを言っていた。

「だって――

恋愛の一番の面白さって結局、一方通行の思い込みじゃない

い。相手を思ってるって言っても、それは自分の中の相手を愛でてるだけの話でしょ。自分に

都合の良い理想を相手に押し付けて、自分は何にも変わろうとしない。愛だの恋だの言っても、結局はそういうことですよ。世界が平和にならないのは、人間風情が愛だの恋だの偉そうにしてるからよ。あたしは絶対やだからね。恋愛に現を抜かすなんていやプーだね。あーやだやだ。やだね、若いってのは」  
と、言うことらしい。

結局、何を言ってるのか俺にはよく分からない人だけど、蒲田先輩はこういう人だった。多分見た目は平均以上の眉目秀麗。成績は至って平均。運動神経も帰宅部の平均ラインを維持してる。黙ってればそれなりの価値がある人だけど、それは蒲田先輩をよく知らない人が思う感想だろう。

何故なら、先輩の価値は『計り知れない』ところにあるんだからな。

「福田！ こんな話を知ってるかい？」

「……………っ！ なんスかいきなり。耳元で叫ばないで下さいよ」

「人類は五百万年後には全滅してるんだってよ！」

「だから……………それが何？」

「……………あれ？ 何だっけ……………確か言いたいことがあったような……………」

今日も先輩は自分勝手に、明日も先輩は自分勝手なんだと思う。けど、

「……………そう！ 思い出したっ！ だが！ それがいいっ！」

蒲田先輩が唐突に叫ぶ。

「……………勝手に人のココロ読まないでもらえますか？」

「……………？」

そんな先輩の自分勝手に五百万年続けば、ひよっとして人類は滅びなくて済むのかも知れな

い

とか

「なわけないスよね」

「……………？ 何いってんの？ 福田」

「いんや、こっちの話ですよ」

色々文句を言う先輩を適当にあしらいながら思う。

今もって、先輩の価値は計り知れないッス。